深代惇郎著「深代惇郎の天声人語」朝日文庫、朝日新聞出版 2015 年 9 月 30 日刊を読む（Ⅱ）

子規逝くや

１正岡子規の俳論、歌論について論ずる知識は持ち合わせないが、子規はえらい男だったと思う。23 歳の春、血を吐いて肺病と宣告された。血を吐いた自分にかけて、このとき、「ほととぎす」とも読む「子規」と号した。36 歳で、ぼろぼろの肉体となって死んだ。

２．短い後半生は、体中にキリで穴をあけられるような激痛にさいなまれつづけた。その『墨汁一滴』には「人の希望は初め漠然（ばくぜん）として大きく、後漸く小さくなる」と書いている。はじめは、せめて庭を歩きたいと思った。つぎに、歩けなくても立つことさえできればと思った。やがて立つことはかなわぬとしても、座りたいと望んだ。

３．今は、座ることはできなくとも、1 時間なりと安らかに寝たいと思う、といっている。『病牀六尺』では「ほとんど毎日気違のような苦しみをする…絶叫、号泣。益々絶叫する。益々号泣する…誰かこの苦を助けて呉れるものはあるまいか。誰かこの苦を助けて呉れるものはあるまいか」と、悲鳴をあげた。

４．死ぬ 8 カ月前から、ほとんど危篤状態だった。だがそれほどの拷問も、子規の志を奪うことはできない。「貫之は下手な歌よみにて古今集はくだらぬ集に有之候」「天保以後の句は概ね卑俗陳腐にして見るに堪えず」といって天下を驚かせた革新の旗を、死ぬ日まで掲げつづけた。

５．モルヒネを飲んでは写生をし、輪講会を開き、『ホトトギス』への寄稿をやめなかった。死の数日前には、水腫（すいしゅ）のため足の指先しか動かせなくなった。子規は「足あり、仁王の足の如し。足あり、他人の足の如し。足あり、大磐石の如し」といいながら、芭蕉の句を評し、最後の輪講をやっている。

６．息を引き取ったのは、9 月 19 日午前 1 時だった。高浜虚子は、近所の門下生に知らせるため子規庵を出た。旧暦十七夜の月に「子規逝くや十七日の月明に」の句が、思わず口をついて出た。きょうは子規忌。あすは十五夜となる。（1975 年 9 月 19 日）

P368 ～ 370

― 2015 年 11 月 23 日　林　明夫記―